

## B-2 衣服改良問題と近代女性の洋装

和洋女子大 ○遠藤 武  
山本 政

1. 和服改良の問題は江戸時代から有識間で問題とされていた。それは主として男子に限られたことであったが、明治中期から末期にかけておこった衣服改良は女性の非活動的な袖、袂、丈、帯が問題とされた。大正に入って女性が男性に互して社会生活の中で活動する気運がめばえるにつれて和服よりも洋服のよさが認識され、生活改善運動と相まって女装の洋装化が理論よりも実行にうつされていった世相の経過を観察する。

2. 当時の文献資料（雑誌、新聞、単行本、写真）を通じて社会、経済の変動と封建社会にはみられなかった女子教育の新しい発展活動のあとを辿りながら和服生活の便、不便を追求しつつ、高層建築の発展につれて和服改良よりも洋装にならざるを得なくなった事情を求めた。

3. 明治中期の衣服改良は、その主旨を誤って美服、高価なものを着ることにあつたが、女学雑誌にとり上げられた識者の言は女性が活動する上の便、不便を問題とし、その改良案として上下二部式な筒袖袴が提唱され、これを実行に移した学校さえみられた。しかし所詮は改良であつた。ひるがえって身分や職業がやかましい時代では、洋装のよさは理解されても実用化はむずかしかったが、大正の中頃から生活改善運動と女子の職場進出が急速に多くなるにつれて、これに加えて関東大震災が一つの契機となって、高層建築と立式生活はいつか職場から和服を自然に除去する傾向があらわれ近代女性の洋装化となった。